

高梁の 近代化遺産⑤

吉岡銅山(2) 三菱商会による近代化

岩崎弥太郎が現在の高知県安芸市で生まれたのは天保五(一八三四)年。三七歳で「土佐開成社」を興し、「九十九商会」、「三川商会」から「三菱商会」としたのが明治六年。同年公布された「日本鉱法」により、「吉岡銅山」の経営権を得たのは四〇歳の時でした。わが国に西洋式掘鑿技術がもたらされたの



一般公開されている笹畝坑道。三菱商会によって吉岡銅山に組み込まれた鉱脈のひとつ。吹屋地区には無数の間歩が存在し、地下には縦横無尽に坑道が走っている。『成羽町史』は、明治43年の鉱区総坪数144万9,276坪に及んだと記録している。明治6年に104坪を借区しての開業から大きく発展したことがわかる。

は明治時代。ノーベル社のダイナマイトは明治一二年に輸入されました。岩崎が率いる三菱商会はこれらの最新技術を導入し、縦坑や通洞坑を開鑿。採鉱、排水、輸送に革命的な近代化をもたらします。

坑道距離が延長され、銅生産高は増大。人力や馬力に頼っていた坑内外のトロッキ輸送にも技術革新が求められました。電力供給の必要性です。吉岡銅山は明治三六年、「笠神発電所」の運転を開始させました。岡山県初となる水力発電所の軀体は煉瓦造。ドイツ、ウエスタンマイニング社の発電機二基が設置されました。その後、電力需要は大きく伸長。

二代目となる「井川発電所」が大正六年に完成。三六〇キロワットだった出力は五六〇キロワットに増強されました。「井川発電所」の古写真には三菱のマークが写っています。

銅生産の増大に伴い、主要鉱区は吹屋から坂本に移ります。また、岡山県内にも複数の鉱区を擁するまでになりました。明治二六年には銅山事務所を坂本に移転。坂本の斜面には三本のインクラインが走り、その上下を無数のトロッキが行き交うスケールとなります。インクラインとは、銅山の高低差を克服するためのケーブルカーです。最大産出量を誇った第三番坑から掘り出された銅は電化されたトロッキで運ばれ、精製過程を経て、インクラインで地上に降ろされたのです。現在の銅山跡には、かつてそこに大規模銅山が稼働したことを想像させないほど自然が回復。人の営みは覆い尽くされ、選鉱場や精錬所の場所特定も容易ではありません。



成羽川沿いの岩肌に残る専用軌道の跡。原料や製品などの運搬は明治32年に全通した東城往來を馬車輸送に頼っていたが、輸送量の確保などを目的に明治37年専用軌道の敷設に着手。広島県深安郡の水田市太郎が工事を請け負った。成羽一田原間の道幅は約1.5m、延長約16km。高さ奥行きとも2m掘削した難工事箇所もあった。

明治四一年には田原と成羽の間に専用軌道が開通します。トロッキ道として残る鉄道輸送路の完成です。人が押した單車トロッキは、六輛程度が増結されるようになった頃馬車鉄道になります。馬トロの愛称で親しまれ、貨物以外に市民の足としても活躍しました。専用軌道は、大正八年に坂本まで延長されインクラインと直結。切羽から坂本を経て成羽に至るトロッキ輸送体系の完成をみます。切羽とは鉱石を掘る現場、採掘場です。

吉岡銅山の最盛期は明治四四年。売銅五五万三〇六九円六一銭、売銀九万一一四円四九銭、総売上金六万四三二八四円一〇銭でした。成羽町の歳入総額が二万三三二円の頃です。

(文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニケーション学科准教授・小西伸彦さん)

編集と発行(毎月15日発行) 高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

再生紙を使用しています。